やまと万葉がたり

龍の馬も 今も得てしか あをによし 奈良の都に 行きて来む為

大伴旅人(巻五・八〇六)

新元号「令和」ゆかりの人物である大伴旅人は、大宰帥(大宰府の長官)として当地に赴任していたとき、奈良を思う望郷歌も残しています。

この歌は、都に住むある人物からの便りに返した書簡文に付して贈られたようです。その書簡文には、天の川を隔てた牽牛と織女のように平城京と大宰府に離れて切ない気持ちを覚え、恋人を待ちながらついに命を落とした尾生と同じようにつらい思いだと述べて、お互いに無事でお会いできる日を待つばかりだとあります。

牽牛・織女といえば、現代日本でも開催される七夕行事にまつわる人物です。元は中国の星の伝説であり、天帝の娘である織女と普通の人間であった牽牛が年に一度七夕の夜にだけ逢瀬を許されるというお話です。尾生とは男性の名であり、橋の下で女性と待ち合わせたが相手は来ず、川が増水しても約束を守って待ち続け命を落としたという「荘子」や「史記」に載る故事に基づいています。また、歌に詠まれている「龍の馬」とは漢語の「龍馬」を和語化したもので、特別な駿馬を意味したようです。いずれも中国文学の豊かな知識を下敷きにした表現といえます。

この歌では、天空をかけるような駿馬を所有していたら大宰府から奈良の都に行って帰ってくることもできるだろうに、と嘆いています。対して「龍の馬をわれは求めむあをによし奈良の都に来む人のため」(巻五・八〇八)という答歌も収載されており、作者は記されていませんが、中国文学の知識があり旅人の心境をくみ取って和歌を贈ることのできる教養のある女性が都にいたのではないかともいわれています。

【訳】天空を馳ける龍の馬も今はほしいものです。美しい奈良の都に行って帰るために。

(県立万葉文化館指導研究員・井上さやか)

=次回は24日

やまと万葉がたり

包もがと 乞はば取らすと 貝拾ふ われを濡らすな 沖つ白波

（作者未詳 巻七・一一九六）

海のない奈良県で編集された「万葉集」にも海辺の景がしばしば登場します。

この歌は摂津国（現在の大阪府北部・兵庫県東部）で詠まれたという歌群の中の一首です。大和国（現在の奈良県）からかの地を訪れた人物が、おそらくは海を見たことのない妻か恋人に何かお土産をと考え、貝を拾っていくことにしたようです。ところが、慣れない海辺の貝拾いで衣がぬれてしまったとみられます。沖の方から打ち寄せてくる波に向かって、そんなにぬらすなよ、とまるで人間相手のように語りかけています。

家人へのお土産に貝を拾うという発想は他の歌にもみられます。例えば「家づとに貝を拾ふと沖辺より寄せ来る波に衣手濡れぬ」（巻十五・三七〇九）は、国を代表して新羅国へ派遣された人が詠んだ歌であり、波にぬれるのは特に袖の部分であると表現されていることが注意されます。単に波しぶきで衣がぬれるのではなく、旅先での不安や寂しさに涙を流し、それを衣の袖で拭うことを示しており、袖をぬらすとは泣くことの婉曲な表現でした。

そうした不安な気持ちや恋心を忘れさせてくれる、特別な貝があると詠む歌もあります。ただし、「手に取るがからに忘るると海人の言ひし恋忘貝言にしありけり」（巻七・一一九七）のように、手に取るとそのまま忘れてしまうと漁師が言った恋忘れ貝とは言葉だけだった、とむしろ切ない思いをとうてい忘れることなどできないと嘆く方が多かったようです。

海のない地域に都があったからこそ、海への憧れが多くの表現を生んだのかもしれません。

（県立万葉文化館指導研究員・井上さやか）

【訳】みやげが欲しいといったら与えようと思って貝を拾う私を濡らすな、沖の白波よ。

＝次回は8月7日